

Title	『諸蕃志』の竇翠国(ファンスール)と竜脳(カンフル)
Sub Title	Chau-Ju-Kua and Camphor mentioned in Chu-Fan-Chi
Author	池永, 佳昭(Ikenaga, Yoshiaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.1 (1977. 1) ,p.33- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19770100-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『諸蕃志』の賓率国と龍腦

池 永 佳 昭

目次

一、序 二、『諸蕃志』の賓率国 三、バルス国（婆律国）とパンスール（賓率国） 四、むすび

一、

『諸蕃志』は、南宋の理宗の宝慶元年（一二一五）に、福建の泉州において福建路の提挙市舶（海外貿易の監督官）の職にあつた趙汝适によつて書かれた書物で、宋代南海諸国の地理、風俗、物産等が主な内容である⁽¹⁾。研究書としては、すでに一九一二年にヒルト、ロックヒル両氏の名著 Chau Ju-Kua⁽²⁾ が出版されており、現在学問の進歩により色々訂正の必要性もでてきたと思えるが、やはり大著にはかわりがない。本稿は『諸蕃志』卷下の冒頭、脑子（camphor）の条に記述のある脑子すなわち竜脳の產出地賓率^{ビンソウ}（Fansur）国的位置と性格について考察したものである。竜脳（カンフル）は香料史に関するものであるが、香料史、商品史、貿易史に関しては山田憲太郎先生に、東南アジア史に関しては松本信広先生に、アラブ史料に関しては前嶋信次先生に御指導を頂いた。本稿を三先生に捧げたい。

二、

まづ、『諸蕃志』卷下の志物の脑子の条には、次の記述がある。

『諸蕃志』の賓率国と竜脳

(A)、腦子出渤泥國一作
仏尼、又出賓寧國。世謂三仏齊亦有之非也。但其國扼諸蕃來往之要津、遂截斷諸國之物、聚於其國。以俟蕃舶貿易耳。

(B)、腦之樹如杉。生於深山窮谷中。經千百年、支幹不曾損、動則贍ヨウ（贍の讃字、贍とも書く。）有之。否則腦隨氣泄。土人入山採腦（以下は採取方法と龍脳の種類を述べてある。ここでは省略する。）……。

また、(A)は、腦子(camphor)は渤泥國（ボルネオ、本稿ではふれない）に産出する。また、賓寧國にも産出する。世間では三仏齊にも出ると証うが、それは誤りである。といふのは、其の國（三仏齊）は、諸外國の船が往来する要津（かなめなる港）になっており、ついに諸国の交易品を截断（切断）し、其の国に集めると共に、貿易船を待つて交易するからである。

と証うことであるが、第一に問題になるのは、龍脳の産出地についてである。この記述によると、ボルネオと賓寧國が產地であるが、この記述のみでは賓寧國がどこに位置するのか不明であり、『諸蕃志』全二卷の記述の中で賓寧國の名が見えるのはこの(A)の文のみである。これによると、賓寧國はボルネオ以外の地にあり、三仏齊とも異なる地域である。三仏齊は現在のスマトラ島ペレンバン地方を中心とする宋代の大國であった。

龍脳は龍脳樹から取れる香料で、液体と結晶体の二種類がある。龍脳樹の学名を *Dryobalanops aromatica* Gaertn., Dipterocarpaceae, といふ。中國南部産を主とする樟腦 (*Cinnamomum camphora* T. Nees and Eberm., Lauraceae.) とは区別される。龍脳樹の産出地は、

- (1)、ボルネオ島の北部 Sarawak, Burnei 地方と Labuan 県。
- (2)、マレー半島東岸の Trengganu や Pahang, Selangor や檳城の Johore。
- (3)、スマトラ島南海岸のマハッ洋洋と面する Bakungau や Sinkel, Barus やくと Airbangis までの 0 度から北緯 3

度までの地域。

と考えられるから、賓寧國の位置の可能性としては、(2)と(3)の地域になる。

次に、腦子の條⁽⁴⁾の記事で問題になるのは「截断諸國之物」であるが、この文だけには意味がはっきりしない。ヒント、ロックヒル両氏は、

the produce of all other countries is intercepted and kept in store there for the trade of foreign ships.

と翻訳してある。⁽⁵⁾ intercept を奪い取る事とするべく、諸国のかぐての産物は奪い取られ、外国船との交易の為にその地に集積される、という意味になるが、截断が intercept に翻訳できるかどうかが問題になる。たとえば、貿易者にとっては利益の追求が最大の目標であると見えるので、品物を奪い取られてしまおうとなれば、かならず他の航路を考えるし、自分達に有利な方法を取るなりである。私にはこの記事は、『諸蕃志』の著者趙汝适が、巻上志國の三仏斎の内容をふまえて、世間では竜脣（腦子）が三仏斎に産出する様に言われているが、実はそこには産出しないのである、といふ事を説明するために要点のみを簡略に述べたものだと思われる。すなわち、三仏斎國の条には、

番商興販用金、銀、銅器、錦、綾、纈絹、糖、鐵、酒、米、乾良薑、大黃、樟腦等物博易。

其國在海中。扼諸蕃舟車往來之咽喉。古用鐵練為限。以備他盜。操縱有機。若商舶至則縱之。……若商舶過不入、即出船合戰。期以必死。故國之舟輒湊焉。

とある。宋代の三仏斎國の性格をよく示した記述だと思えるが、この記述から考へれば、卷下の諸國の物を截断するならば、物資を途中で奪い取る事ではなくて、取引きが終るまで管理するといった意味（すなわち、三仏斎で交易をやむこと）ではなかろうかと考へる。であるから、諸国の船が三仏斎の港に入港すればそれですむが、入港しなかつた場合には三仏斎の官船から攻撃を受ける事になる。そこで多くの貿易船は三仏斎の港に入ることを余儀なくされる。三仏斎が鐵練（鐵の

鎖) を使用したのは他の海賊船から守る為だと顯れる。この様に宋代、三仏齊はマレー半島のカラ(唐代の箇羅)、セイロン島、アラビア南岸のドゥファール地方などと同様に東西の重要な貿易港であったが、ただ地の利だけでなく発展する為の色々な努力がなされた様に思える。

次に(B)の記述であるが、賓寧國に産出する龍腦の採出方法が詳細に記してある。この文で問題になるのは「動則贋有⁽⁷⁾」であるが、ヒルト・ロックヒル両氏の翻訳には、

The camphor-tree is like the pine-tree (杉); it grows in the depths of the hills and the remotest valleys. So long as branches and trunk continue unhurt, the tree will contain the gum even for hundreds and thousands of years; otherwise it will evaporate.

とおり、原典の文意は十分理解し難いが、この部分は翻訳されていない。私の考へでは、脑子の樹すなわち龍脳樹は、杉の木に於て深山窮谷の中にある。千百年たつても、枝や幹に損傷がなければ、〔樹を〕動かしても、十分⁽⁸⁾其(脳——カシフルの液体——)があるが、やうやかない場合は、樹の性質上、流れ出てしまつ。土人は山に入り脳を取る。……むこう意味になぬ。むかうのは、趙汝适がこの文面(B)を十一世紀(一一五^一)の葉庭珪の『香譜』から引用しており、幾分変化をせつくるので、両者を比較考察する事による文意を考え得るのである。十四世紀(一一三^一一)の陳敬の『新纂香譜』、龍脳香の條に引く所によれば、

葉庭珪曰。渤海、三仏齊亦有之。乃深山窮谷千年老杉樹、枝幹不損者。若損、動則氣泄脳矣。……

と記す事である。前述(A)の記事に趙汝适は、龍脳樹が「生體三仏齊亦有之非也」と記していたが、これは葉庭珪の「三仏齊亦有之」に対する訂正をしたものと考えられる。

三、

次に、いよいよ龍脳の産出地賓翠国についてであるが、まづ、唐代の龍脳の産出地について中国史料から考えてみたい。『新唐書』(卷二二二)下の室利仏逝國(三仏齊の前身)の条には、

室利仏逝一日「利仏誓。過軍徒弄山(ペリオ説、一一八頁。——condre島)二千里。地東西千里。南北四千里。而遠有城十四。以二國分。惣西日郎婆露斯。多金、永砂、龍脳。

とある。室利仏逝國が二つの王国に分けられており、その西の方が郎婆露斯と呼ばれ、龍脳、金等を多く産出するところである。この郎婆露斯は次に引用する「婆魯師」の事と考えられる。義淨の『大唐西域求法高僧伝』(上)によると、

新羅僧一人南海汎海至室利仏逝。西婆魯師國。遇疾俱亡。

とあり、同じく義淨の『南海寄帰伝』によると、

從西數有婆魯師洲。未羅遊洲……。

とある。これらの中から考えて、郎婆露斯と婆魯師は同國だと考えられ、マラッカ海峡側の西半分の記述と考えられる。これ以外の史料として賈耽の『道里記』(『新唐書』四二)があるが、婆魯師はその中の「婆露國」の事と思える。ただ、ここで問題になるのは郎婆露斯の「郎」であるが、これについては定説がない。ただ、大きく分けると一つの考え方ができる。一つは、内容から考えて郎婆露斯がスマトラの西北部半分の地方を示していると考えられる事で、今一つの考え方では、郎婆露斯、婆魯師共にアラブ史料の *Laṅgā bālūs* すなわちニコバル諸島を示したもので、婆魯師は *Laṅgā* が省略された形で *bālūs* に対比されるというものだ、それに賈耽『道里記』の「婆露國又六日行至婆國仰藍洲」の婆露國もニコバル諸島と⁽¹⁹⁾考えた。ここでは、私は内容から考えて前説に従つておく。と言つるのは、後で述べる事になる龍脳の产地

バロスとの関係においてもニコバル島とは思えないからである。そして *Langābālūs* は婆國伽藍洲、すなわち正確には「婆露國藍伽洲」と対比であると思える。⁽¹⁾

次にアラブ史料からの龍腦の産出地を考へてみたい。おり、九世紀のアラブ地理学者 *Ibn Khordādhbeh* の記述による

、「Sirandib（セイロン島）の向こう側には Rāmī の島がある。その島には犀がいる。この動物は象よりも小さいが、水牛よりも大きい。また、〔この動物は〕草食性で、牛や羊の様に反芻する。そこには尾のない水牛もいる。この島には竹と蘇木 *baggam* (le bois du Brésil) が産し、後者の根は生命をうばってしまった様なひどい毒を消す力がある。……別の島には髪の短く縮れた人を食う黒人どもがいて、生きたままで切りあわてて食べる。……」

Djawaga の山には、人間や水牛をむさぼり食う巨大なヘビがいる。象やえぐるのもいるのである。この国には巨大な龍腦樹（シャジャル・ル・カーフール）が産出する。すなわちこの樹の葉影はおへよそ百人の人を覆うことができるくらいである。camphreを得る為には、通常、木の先端（上部）に、一つの切り口をつける。そうすると、カンフルの液（mā' al-kāfūr）がいくつもの壺をいっぱいにしてしまって大量に滴出してくる。（それを収めてしまった後に）、つぎに下の方、樹のおよそ中央の所に他の切り口をつける。そうすると、そこからカンフルのかたまり（gita' al-kāfūr）が発見である。すなわち、それはこの樹の「コムであるが、しかも同じ樹から出るのである。この様にした後には、この樹は無用になり枯れてしまう。……」

中國へ行こうとする者は、*Bullin* を出発してから、その右方にゐる Sirandib の島にとどまり、*Langābālūs* の方へ赴く。その島（ランガバールース）は、Sirandib から十日から十四日の距離にある島である。

この島 [*Langābālūs*] の住民は、はだかである。彼らは、バナナ、生魚、ここの実で生活している。彼らの間で

貴金属は鐵である。彼のは外國商人と親交にしてゐる。……

Laṅgabālūs [の島] から Kilah の島へは、六日間の航海である。この島はインダ人の Djāba 土國に屬する。そこには kala'i といつ錫で有名な鉱山と竹〔植樹〕がある。

Kilah から左方一日間行く Balūs の島があり、人食い人種が住んでゐる。この島には、上等のカンフル、バナナ、ココヤシ、砂糖キビそれに米を産する。⁽¹²⁾」

この記述によると、龍脳の産出地は Djawaga の三母ムル Balūs の島との二個所といつ事になる。前者は位置が漠然としているが、後者の Balūs の島は Kilah (頭駄の箇羅で現在のマレー半島極部の Kedah がそれまでの箇羅) から左方一日間の所といつのであるかい、中國史料の郎婆露斯、婆魯師、婆露國に比定であらうと思える。

次に同じく九世紀の Akhbār aṣ-Ṣīn wa'l-Hind 通称 Sulayman (851) の旅行記によると、

「Sirandib も同じ方向にある [Harkand] の海にば、多数でさなうが非常に広々とした幾つかの島があり。正確な面積は知られていない。この諸島の中には al-Rāmni も呼ばれる島があり、幾人かの王に分割されている。その広さは八百あるには九百ペラサハシ (平方) である。この地には金鉱がある、fanṣūr も呼ばれる樹木も生田である。この樹かん最上のカンフル (龍脳) が採取される。これらの諸島は他の諸島に従属してゐる。それらの中には Niyān の島がある。」

これらの諸島は金に富み、その住民は椰子の実を主食としてゐる。……」

on y remarque aussi des plantations appelées *fançur* et d'où l'on tire le camphre de première qualité.

この文を意訳した文である。この文が問題にならぬのは *plantation* である。たゞ、J. Sauvaget 出の原文

訳文によると、

Il s'y trouve beaucoup d'or et un endroit appelé Fantsour, qui produit en abondance le camphre de bonne qualité.

とある。⁽¹⁴⁾ すなわち、その地では (y せ Lambri' フランスの Rāmni) 金を沢山産出し、ファンスールといふ土地には上質のカンフル (龍脳) を沢山産出する、という事である。この場合のファンスールが樹木の事であるのか、また地名なのかが重要な点であるがスレイマンのアラビア語原文を見ると、明らかに場所という文字になつてるので、ソウバーゼ氏の翻訳の方がより適切であるといふべきだ。

また、十世紀初期の Abū Zayd (916) は、Rāmī の島に蘇木と龍脳が見出せるとのみ記しているが、中期の Mas'ūdi (943) は、「その島 (Rāmin) には金鉱が沢山あり、カンフルで有名な Fančūr 国の隣にある。……」としている。⁽¹⁵⁾ これらのアラブ史料の「ファンスール」図が『諸蕃志』の「賓寧國」に比定されるといふのである。これはすでにヒルト・ロックヒル両氏の見解でもあり、⁽¹⁶⁾ 諸学者にみとめられる所である。問題は、その場所である。そして、龍脳の産出地バーレースとファンスールとの関係である。

賓寧國は、『諸蕃志』以外の中国史料を調べてみると、元の『島夷志略』(紹、一二五一年) に班卒國とあり、「地勢連竜牙門」と記している。そして、その地の物産に竜脳はのせていない。竜牙門は、志略に專条があり、藤田豊八博士の校註には「案鄭和海図以「竜牙門」為「島名」又為「碑名」其島殆今 Lingga」とある。⁽¹⁷⁾ しかし、この記述をみてもどこに位置するのか確かでない。次に『鄭和航海図』の班卒であるが、この書は、明末天啓元年(一六二一) 茅元儀の『武備志』の卷一百四十に収められていて、航図の内容は十五世紀まで遡るといふ。⁽¹⁸⁾ この図によると、現在の Barus (スマトラ西海岸) の附近の山中を示している様にも思えるが、バルス地方そのものを示しているとは思えない。図から見るかわりは地名と記

うよりも班卒という山を示したものである。⁽¹⁹⁾

今までに述べた中国史料のバルスは、スマトラ島のマラツカ海峡側に面する地方の西半分を漠然と示したものであつたが、現在のスマトラ南海岸のバロスについては、十六世紀のトメ・ピレスの記述に詳しい。

「さて非常に豊かなバルス「バロス」王国について語ることになった。この王国は別名パンシユールあるいはパンスールとも呼ばれている。グザラテ人はこの国をパンシユールと呼び、ペルシア人、アラビア人、カリンガ人、ベンガラ人なども同様である。サモトラ「スマトラ」ではこの国をバルスと呼んでいる。これらはすべて一つの王国であつて、二つの「別の」王国ではない。この王国は一方ティコに接し、他方はキンシエル「シンケル」王国の地に接している。内陸部ではメナンカボ人と取引をしている。また前面の海上にはミニヤク・バラス「ニアス」島があるが、この島については後に述べる。

この王国はソモトラ全島の品物の取引の中心地である。というのは、ここは黄金、生糸、安息香、大量の竜脳、薑薑、蜜蠟、蜂蜜、およびその他の品物が通過する中継港で、そのためこの王国は今までに述べたどの王国よりも豊かである。⁽²⁰⁾

という事であるが、この記事により、バロスとパンスールの関係は一目瞭然である。そして、非常に重要な内容だと思える。すなわち、スマトラ西岸の現在のバロス「バルス」はアラブ人等の呼ぶパンスール國すなわち『諸蕃志』の賓率國と同一の国であつて、別々の国ではない。そして、スマトラ島民がこの国をバルスと呼んでおり、島民以外の外国人すなわちアラブ人等がバルスをパンシユールと呼んでいる。という事は、ポルトガル人の側からみた場合は、ベンガル人やアラビア、ペルシア人のいう竜脳で有名なパンシユールあるいはパンスールが、原地え来てはじめて「バルス」という地名である事を知つた事になる。さらに一步進めて考えてみると、スマトラ島民にとつてはパンスールすなわち賓率という地名

は存在しない事になる。また、この国はスマトラ全島の品物の取引きの中心地であつて、大量の竜脳や他の品物が通過する中継港であると記し、竜脳の産地であるとは記していない。

以上の史料からバルスとパンスールとの関係を整理してみると、九世紀中葉イブン・フルダードベー(八四四—八四八)の上等の竜脳の産出地は *Balus* すなわち、婆露師の事でマラツカ海峡側のスマトラ西北部地方を示している。ところが同じ頃のアフバール・アッシーン・ワル・ヒンドの記述(八五一)によると、バルスという地名ではなくて、ファンスール国に竜脳が出ると言う。このファンスール国はランブリ国(スマトラ西北端地方)の隣にある(マスウーディーの記録) というのであるから、これも現在の南岸バルスの事ではなく、地理的にみても婆露師の事と考えられる。そしてこのファンスールが中国に伝えられて『諸蕃志』の賓率国となつた。そしてこんどは、十六世紀のトメ・ピレスの書に現在の南岸のバルスがアラブ人の言うファンスール国として出現する。ところがトメ・ピレスのバルスは竜脳の産出地ではなくて物産取引きの中継港であると言う。また、前述の様にスマトラ島民にとつてはバルスという地名は存在するが、ファンスールという地名は存在しない。それではなぜアラブ人が竜脳の産出地をファンスール国としたのであろうか。今まで考察した史料のみでは解決できない。ただ考えられる事は、アラブ人がアフバール・アッシーン・ワル・ヒンドの編纂のころ(九世紀中ごろ)、竜脳の産出地をスマトラ島民から「ファンスール」と聞きちがえた可能性もあるかも知れない。しかしバルースが訛つてファンスールになつたとは考えられない。あるいはマレー語で竜脳を示す *<kapur>* をファンスールと聞きちがえたのではないだろうかとも考えてみたが確証はない。ただ、一つだけ確かな事は、スマトラ南岸の現在のバルスは竜脳の産出地ではないという事である。『諸蕃志』に腦子(竜脳)は深山窮谷中に生ずるとある様に山間地方の住民によって採取され、それがやがて貿易港三仏斎や〔現在の〕バルス等の中継地へもたらされた事はまちがいない。三仏斎に貿易に来ていたアラブ人は勿論の事、三仏斎等海岸地方に住んでいる島民にとつても竜脳樹を実際みたわけではな

く、山地民からの伝聞であつたと考えられる。トメ・ピレスのスマトラ島の記事から竜脳に関する記述を調べてみると、バタク族の国であるバタ王国（居住地は北部スマトラの南半分と東海岸一帯にかけて、）の条に、少量の食用の竜脳を産すとある。また、アル王国（中国史料の婆魯師地方と一致する様である）には、商品として「相当量の食用の竜脳があり、黄金もある。」と記している。そして「これらの商品の若干はパセー、ペデル経由で捌かれ、その他ものはパンシユール経由で捌かれる。それはアルの国的一部がメナンカボの国にあって、そこにはいくつかの大きな河があり、サモトラ全島は内陸部でこれらの河によって航行することができるからである。」と述べ、内陸部すなわち竜脳の取れる山間部との交通がかなり発達していたものと思える。次に南岸バルスの南にピラマン王国があるが、この国も内陸部はメナンカボ国に接しているといい、「このピラマンの国にはたくさんの黄金、蘆薈、二種の竜脳、安息香、生糸、蜜蠟、蜂蜜がある。」としているが、竜脳が産出するとは述べていない。商品として存在したのであろう。ピラマン王国の隣りがティコ王国でその北部がバリス（バルス）王国であり、それぞれ内陸部はメナンカボ王国と接している。商品は、ピラマン、バリスと同様であるという。そして、バリス王国の條の「ここに述べた三つの王国、すなわちパンシユール、ティコ、ピラマンはメナンカボの要衝である。それはこの「三国の国王」が互いに親戚関係にあり、またこれらの王国が海岸を支配し、グザラテ人は毎年ここに来て、大きな取引をするので、商品はすべてこれらの王国に集められ、ここで上記のグザラテ人と取引をするからである。」という事になる。そして、メナンカボ国については「マラカの側ではアルカトの国にはじまり、ジャニビに至る地域がメナンカボの国と呼ばれている。しかしそれ正確には、その内陸部である。ソモトラ島のもう一方の側では、南に向かつてピラマン〔プリアマン〕、ティコ、パンシユールがそれで、これらの港からメナンカボの国の黄金が出て行く。疑いもなくここがこの全島のもつとも重要なところで、ここで黄金が産出する。しかし島のどこでも多かれ少なかれ黄金は産出するのである。しかしアルカトからジャンビまで、ピラマンからバルスすなわちパンシユールまでをとつた

場合、「そこに」三人のメナンカボの王がいるので、これをメナンカボの国と呼ぶのがもつともふさわしいのである。」と記している。さらに黄金については「もつとも黄金の出る最大の鉱山は、スエンシニギス（スンギリク火山の麓を流れるカンパル河の支流のシ・ニニエ Si Ninje 河の流域であろう。）と呼ばれる河の流れている土地である。二番目〔の鉱山〕では砂金としてより多く発見される。それは、マラパンラギ (Muara Palanghi の対音であろう。) と呼ばれる。どの鉱山でも上記の三人の王だけが採取することができるということである。イスラム教徒は鉱山に行つてはならず、ただ異教徒の領主たちだけが鉱山を守つているのがこの国の特徴である。かれらは黄金を持っている。そしてこの黄金はここからメナンカボの諸王のところに分配され、またこの三人の王から他の諸王に分配される。⁽²¹⁾」という事になる。

以上のように地理的に考えた場合は、『諸蕃志』の賓率国すなわちアラブ史料のファンスール国はこのメナンカボ族の国を示していると考えられる。そして、イブン・フルダードベーのジャワガの山中に巨大な龍脳樹があるというのもこの地方を示したものと考えられる。これとほぼ同じ内容の話は、九世紀後半（唐末）の段成式の『酉陽雜俎』にも伝えられている。雑俎の婆律國も *Balūs* の音訛と考えられる。本稿では雑俎の考察は省略し、次のむすびでこの記事に関する要点のみを述べたい。

四、

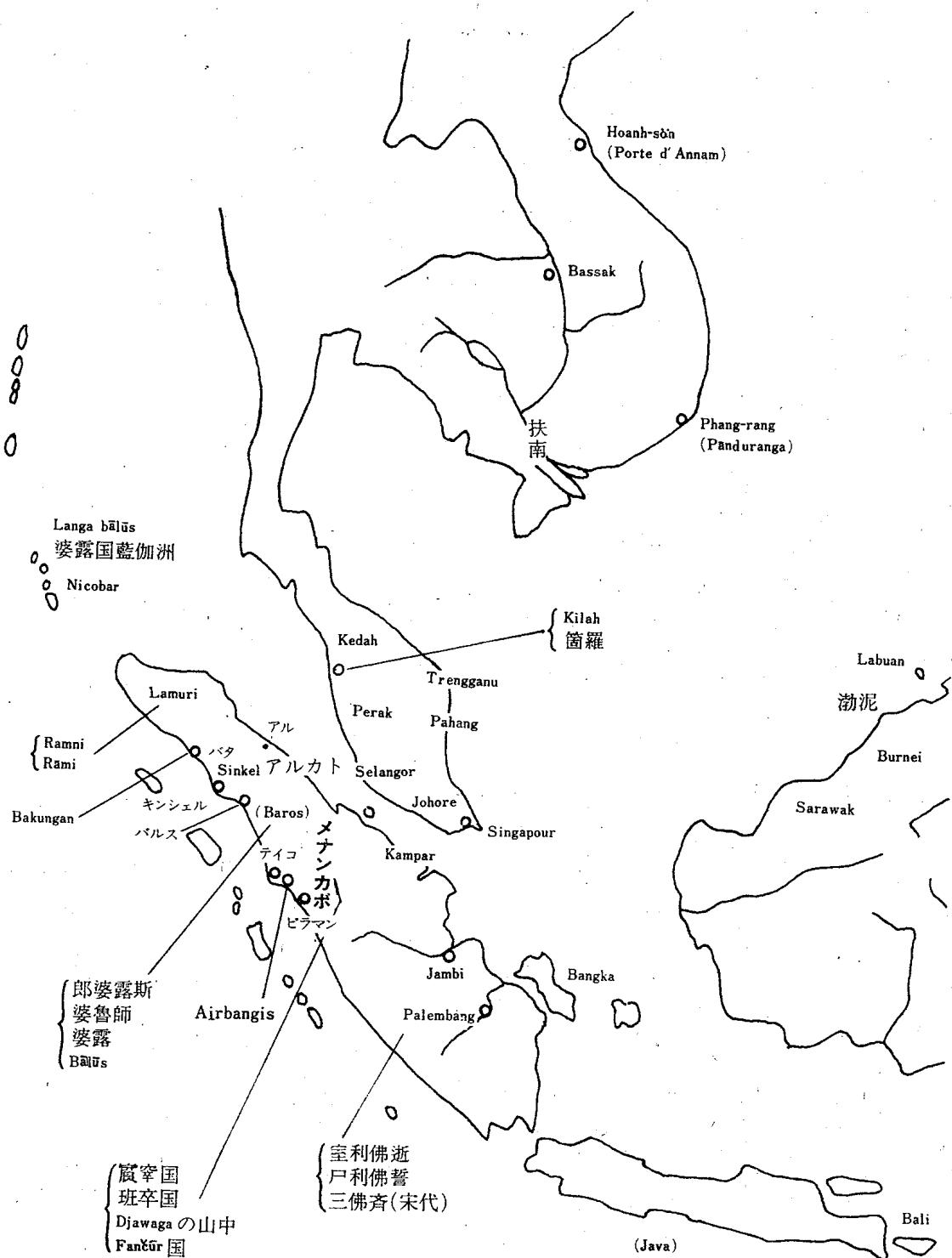
竜脳香は九世紀の段成式の『酉陽雜俎』によれば、婆律國に産出する竜脳樹から取れるものだという。⁽²²⁾ また婆律國に産出する事から婆律香ともいわれ、すでに『梁書』(五十四)にも記述がある。竜脳樹から取れる白い結晶体の部分を竜脳香と言い、同樹から取れる液体の部分を婆律膏として両者を区別している。スマトラ島民はこれらを Kapur と称し、中国えは婆律國に産出する箇不 (Kāpūr) という意味で「箇不婆律」と伝えられた。このカーブールは早くからインドにも伝

えられてサンスクリットで *Karpūra* と呼ばれ（カープールの伝播については別の説がある⁽²³⁾）、七世紀前半にインド各地を旅行した玄奘は羯布羅香（プラクリット *kappūra* からの転写）と伝えた。⁽²⁴⁾ 同じく七世紀の義淨は、『金光明最勝王經』（卷七）の中で、婆律膏は「揭羅婆」⁽²⁵⁾ と讀うと記している。これはサンスクリットの *Karpūra+rasa* かなわち、カルプーラの液体の音訳と考えられる。

ところが、それとは別にアラブ人等のペルシア湾からスマトラにやつて来た貿易商人は、九世紀のイブン・フルダードベーによると、当時の有名な交易地マレー半島のキラー南部（箇羅）から一日の所にあるバールースの島に上等の *kafur* (camphre) があると言う事であり、彼と同じ頃の『中国とインド物語』と十世紀のマスウーディの話によると、Rāmī (スマトラ西北端地方) の隣国であるファンスール国にカンフルが産出すると言う。十三世紀の『諸蕃志』ではこのファンスールが賓率国として伝えられた。そして、バールースはイスラム史料からはなくなってしまった。

イブン・フルダードベーのバールースの島は婆律国のこと、義淨は『大唐西域求法高僧伝』の中では婆魯師⁽²⁶⁾といい、『新唐書』の郎婆郎斯、賈耽の『道里記』では婆露国と記してある。ところがこれらの地名は中国史料からもまったくなくなってしまい、十六世紀のトメ・ピレスの『東方諸国記』にスマトラ西南岸の現代竜脳で有名なバロスとして現われてくる。ところが、このバロス「バルス」を当時のアラブ人等は、パンシユールあるいはパンスールと呼んでいた。

南岸バルスは、竜脳の産地ではなく取引きの中継地であり、竜脳は山間部メナンカボ族を中心とする国から、三仏斎やこのバルスにもたらされた。その地方（メナンカボ国）と賓率すなわちファンスール国は一致する。ところがスマトラ島民にとっては「ファンスール」と言う地名は存在しなかつたと思える。史料から考へた場合には、唐代のマラッカ海峡側のスマトラ西北部地方を示していたバルス地方はやがて近世になつて西南岸バルスを示す地名として表われる事になる。



本稿関係略図
縮尺…1/20,000,000

piré, 29 B.C. To A.D. 641 (Oxford, 1969), p. 40.

(一) 石田幹之助『南海に關する支那史料』(昭和二十年四月)、
一六九—一八五頁。提舉市舶につては、桑原隠藏全集、第五

卷、二十一—二二頁。『諸蕃志』の定本として、東京大学図書

館蔵本『函海』によつた。函海初刻本は、静嘉堂文庫、宮内庁
書陵部、文閣文庫、東洋文庫には存在しなし(石田憲太郎「乳
香没藥小史」、『名古屋学院大学論集』第十号の一九七四年、
二二〇頁)。

(二) Friedrich Hirth and W. W. Rockhill, *Chau-Ju-Kua: His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled chu-fan-chü*, Translated from the Chinese and Annotated (St. Petersburg, 1911).

(三) 桑原隠藏『蒲夷庚の事蹟』、桑原全集卷五、一四一一一四五頁。
藤田豊八「蒲夷仏逝三仏斎曰港は何處か」(『東西交渉史の研究』
南海編、二二一六八頁)。この題題に關つては同博士の外沢山の
研究書があるが、藤澤治は轉記、G. Coedès, *Les États Hindouïsés d'Indochine et d'Indonésie*, nouvelle édition revue
et mise à jour (Paris, 1964), 藤崎政の轉記、O. W.
Wolters, *Early Indonesian Commerce, A study of the origins of Srivijaya* (Cornell University Press, Ithaca,
new York, 1967), 参照。

(四) J. Innes Miller, *The Spice Trade of the Roman Em-*

(五) 山田憲太郎「龍脣考」(『名古屋学院大学論集』第十号、一
九六七年)、一九一—一〇頁。

(六) 前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 193.

(七) 前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 193.

(八) 葉庭珪につては、山田憲太郎『東西香藥史』(昭和二十一
年一九五六一)、一四五七頁。稻田久徳「南蕃香藥と諸蕃志と
の關係」(東京の水大學『人文学部紀要』第十五卷、昭和三十七
年)。前掲、山田「龍脣考」、一八頁。

(九) P. Pelliot, "Deux Itinéraires de Chine en Inde, à la fin du VIII^e siècle," *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient*, IV (1904), pp. 354-355.

(十) 桑田六郎「三仏斎考」(名北帝国大学文政学部『史学科研
究年報』第三輯、昭和十一—一九三六年)、一四五(23)頁、二
九(27)頁。桑田六郎「南洋に於ける東西交通路と就て」(名
北帝国大学文政学部『史学科研究年報』第六輯、昭和十四年六
月)、三三五(1)—四〇(16)頁。

(十一) 山本達郎「足立喜六氏の『九世紀に於ける蘇馬達島南の航
路と關する研究』を読む」(『史學雜誌』四九編 1—1号、昭和十
二年)、一四〇—一四〇頁。

(十二) G. Ferrand, *Relations de voyages et textes géogra-
phiques arabes, persans et turcs relatifs à l'Extrême-
Orient du VIII^e au XVII^e siècles*, 2 vols (Paris, 1913—

1914), pp. 25-27.

(13) 詹撻、G. Ferrand, *Relations*, p. 87.

(14) J. Sauvaget, *Akkār aṣ-Sin wa'l-Hind : Relation de la Chine et de l'Inde, rédigée en 851* (Paris, 1948), p. 4, N° 6^a.

(15) 前掲、G. Ferrand, *Relations*, p. 93.

(16) 前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 194.

(17) 藤田豊八、島夷誌略校注、羅振玉轉寫堂叢刻所収、民國四

(一九一五)年、六五頁表。

(18) J. V. G. Miles, *MA HUAN: Ying-Yai Sheng-Lan, The overall survey of the ocean's shores*, [1433], Translated from the Chinese text edited by Feng ch'eng-chün with introduction, notes and appendices (Cambridge, 1970),

p. 239.

(19) 明末天啓元年(一六一一年)茅元儀『武備志』、卷一百四十、十七頁表、和刻本明清資料集、第六集、二十六十九頁、昭和四十九年七月発行、汲古書院による。

(20) 生田滋訳・注、池上寿夫訳、加藤栄一訳・註、長岡新治郎・註『トメ・ド・レス東方諸国記』(一九六六年一〇月)、二八七—一八八頁。

(21) 前掲、『トメ・ド・レス東方諸国記』、二五七—一九三頁によく。

(22) 宋左圭編、百川学海所収、第十一冊、宋洪芻撰、『和譜』

卷上、番之呂の龍腦香の条に「西陽雜俎」、出波律國。……」

とある。

(23) 私はこれまでにおける龍腦樹の実態についての知識がなじので、和語学的に考へた。番縦史から考へた場合は *Kāpūra*の方が *Kāpūr*よりも語源的に古いことより(前掲、山田「龍腦考」、一一一—一五頁)山田憲太郎『東西香薬史』昭和三十一年、

九六一九七頁)によると。

(24) 玄奘『大唐西域記』、卷十、秣羅矩吒國の条。京都帝国大学文科大学編、明治四十四年。

(25) P. Pelliot, *Bulletin Critique*, T'oung Pao, 13 (1912), pp. 446-481, p. 454.

——1975, 10. 脱稿——